



認知症の当事者と家族、専門職、地域住民などが集い情報交換や交流をする「認知症カフェ」を先月、福山市内で初めて開催した。「昔ながらの喫茶店のように常連が集まって普段はよもやま話に花を咲かせて、何かあった時は助け合う。そんなオアシスのような場にした

い」
介護福祉士などとして、10年以上福祉の現場に関わってきた。認知症の治療法やケアはここ20年で飛躍的に進歩し、国も対策に力を入れる一方、診断にこぎついたり、適した相談先にたどり着く難しさ

認知症カフェを開催した福山平成大教授

なか つかさ と し み
中司登志美さん(54)

—福山市

は昔とさほど変わらないと感じてきた。
と手づくりした。

今年5月、日本認知症ケア学会で認知症カフェの存在を知った。認知症の人と周囲がフラットに支え合えるカフェの手法に興味を持ち、福山市で広めようと知り合いや学生に呼びかけた。福祉事業所が運営するカフェレストランを無

料で借り、チラシは研究室で学生
ーヒーを何杯もおかわりしたり、

課題は資金と場所の確保だ。集会所や福祉施設を使えばトイレなどの施設も充実し経費節減にもなるが、本物のカフェ・喫茶店での開催にこだわった。「認知症ケアで大切なのは、残っている記憶を刺激して環境を整えてあげること。会議の延長のような集会所や、うそ



スタッフから手を握られ、にっこり笑顔をみせる認知症当事者もいた。終了後のスタッフミーティングも白熱。アイデアが飛び出した。その様子に手心えを感じた。

参加者の要望を取り入れ、開催内容は軌道修正していく。地域住民の参加も促すために歌声喫茶を開いたり、障がいを持つ人にボランティアをしてみたら、構

【菅沼舞】

こんにちは
広島

当事者と家族、住民らのオアシスに